



紙芝居「ピカドン・原爆」原作者のシスター、長さん

戦争は人間のしわざ



旧約聖書に「コヘレトの言葉」という十二章からなる書がある。「なんとという空しさ、なんとという空しさ、すべては空しい。……」

すべてに耳を傾けて得た結論、神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間のすべて

長く続く紛争の末にやっとオスロ合意が成立したのは一九九三年のことだった。

あれからもう十六年が過ぎたのに、和平どころか最悪の事態になった。

十二月二十七日、イスラエルがパレスチナ人が住むガザに空爆を

開始した。さらに一月四日、イスラエル地上軍がガザに進攻した。パレスチナ人の死者は婦女子を含め五百人を超えたという。

一九四八年、国連が認めて建国されたユダヤ人の国イスラエル。ユダヤ教は旧約聖書だけを聖書とする。

なんとという空しさ、パレスチナ紛争。和平の兆しが見えた一九九五年、長女のリカはパレスチナに向かい、その地に七年住んで貧しい母子の保健プロジェクトにかかわった。今も東京に拠点を移してパレスチナにかわり続けている。

久しぶりに年末年始を我が家でゆっくり過ごすと言っていたが、外務省への要請などで帰宅したのは大みそかの夜だった。

そして、地上軍が進攻するのではと心配しながら三日、東京に向かった。家にいてもメールで現地と連絡を取っており、友人の家が破壊されたと嘆いた。

長門市と同じくらいの広さに百五十万人のパレスチナ人が住んでいるガザには私も一度、訪れた。最近は一一般だけでなく、報道関係者や支援者もほとんど入国が許されなかったという。悲劇が続くガザに朝が来るのだろうか。

悲劇といえば、日本人だけが体験した原爆の悲劇について山口市の観想修道会カルメル会のシスター、長康子さんが広島での被爆体験を小冊子にまとめられ、山口いのちの会はそれをもとに紙芝居「ピカドン・原爆」を製作した。

ガザ空爆開始前日の十二月二十六日、紙芝居を持ってカルメル会を訪ね、原作者のシスター長を含む十二人のシスター全員に面会室で見てもらった。

目的は原作者に見てもらおうのと同時に最後にもう一枚絵を加え、そこに故ヨハネ・パウロ二世が被爆地、広島から「戦争は人間のし



山口カルメル会の12人のカルメリット

わざです」と全世界に向かって言明された言葉を追加した方が良いのではないかと提案したのである。

原作者はもちろん、十二人の共同体の皆さん全員が賛同された。今も続くパレスチナ紛争をはじめとする戦争は、まさに人間のしわざである。

修道院の囲いの中で生涯を神への祈りと労働で生きる観想修道会で神との太いきずなで結ばれた十二人のシスター全員と久しぶりに面会して身も心も清められ、本当の人間の救いは、神から来るのだと確信したのである。（元山口放送取締役ラジオ局長）